

## 進捗状況の概要

### 1. アクティブラーニング (AL) を中核とする教育改革の推進

地域課題解決型 PBL を 4 年間の継続的な学びとして体系化するカリキュラム改革を推進：

- ・教養ゼミ (必修)： PBL リテラシー教育を全ゼミ共通に定め (シラバスに明記)、「合同発表会」と「合同ディベート大会」の開催を定例化。
- ・地域ゼミ (必修)： 平成 25 年度に開講した「地域ゼミ」(地域課題の発見・解決に取り組む PBL 型授業)を拡大実施 (26 年度 9 ゼミ⇒27 年度 19 ゼミ)し、全ゼミの合同発表会を定例化。平成 27 年 11 月の教授会で平成 28 年より必修化を決定し、AL プロデューサーによる地域課題の研究テーマの掘り起こしを開始した。その結果、平成 28 年度実施の「地域ゼミ」は 22 ゼミまで増加した。
- ・専門ゼミ I・II (選択必修 (経済) / 必修 (福祉情報))： 地域課題のリストを AL プロデューサーと担当教員とで共有化し、卒論指導に活用できる体制を整備。

### 2. AL 度の把握・評価システムの構築

- ・「学生が何をできるようになるか」を基準に講義の AL 度を 6 段階に階層化する「徳山大学 AL ヒエラルキー」の概念を導入。それに基づき各講義における ㉞担当教員の AL 導入度自己評価、㉟学生目線による AL 度評価、㊱学生の AL 参画度自己評価をおこない、講義の AL 導入度とその教育効果を可視化する指標 BAL (Barometer of Active Learning) を定めた (BAL 値の意味付けの改良)。
- ・上記㉞㉟㊱の評価を全教科に亘りオンラインで実施し、結果を本学固有のデータベース「CASK (キャリア形成支援学生カルテ)」内に公開するシステム (イメージを巻末の<その他>に掲載)を構築した。これによって、教員が各担当授業における AL 導入度とその効果 (教育目標の達成度)を把握しつつ、AL 推進による授業改善の定量的な目標を設定することが可能となった。

### 3. 「課題対応能力」を評価する「地域ゼミ」コモン・ルーブリックの開発とシステム化

PBL の育成目標である「課題対応能力」を 8 つの観点 (①情報選択②現状認識…⑦結論導出⑧プレゼン力)から評価するコモン・ルーブリックを作成。担当教員がオンラインで容易に評価でき、結果のレーダーチャートが自動的に「CASK」内に公開・蓄積されるシステムの開発をおこなった。平成 28 年度からその試行利用を開始し、担当教員の使用感・意見を基に改良を進める作業を継続中。

### 4. 学内 AL 先進事例の創出と共有化

AL 推進委員会を中心に反転授業の導入を進め (4 講座)、実施レポートを作成し学内で蓄積・共有化する取り組みを開始した。全教員を対象に AL アンケート調査を実施し (前期・後期の 2 回)、各教員による AL 実践の情報を集約した報告書を作成し、学内で共有化する取り組みを開始した。

### 5. 学生間の相互教育 (循環型人材教育) 体制の構築

学生間ピア・サポートの制度化に向けたパイロット事業として、情報教育における学生指導員 (Student Instructor : SI) 研修制度の構築を開始した。教材「徳山大学 Student Instructor (SI) 指導マニュアル」「SI マナーの心得」を作成し、ピア・ラーニングの体制整備を進めた。

### 6. 学外での AL 先進事例情報の収集、ワークショップ、FD・SD 勉強会等の開催

- ・AL 推進に関する学外先進事例の情報収集として以下の研究会参加・視察等を実施した：  
中国・四国圏域インターンシップ・フォーラム (PBI 先進事例) (5 月)、前橋国際大・立正大・崇城大での AP 事業視察 (12 月)、北九州大学 AP フォーラム (1 月)、大学教育改革セミナー～AL とその学習評価 (会場：東北大) (2 月)、産学協働教育シンポジウム (PBI 等) (2 月)、第 22 回大学教育研究フォーラム (会場・京都大) (3 月)、AP ジョイントフォーラム～山口・広島地区 (3 月)
- ・AP 事業成果の学内外への還元を目指して以下の勉強会等を開催した：  
ルーブリック勉強会 (5 月)、高大連携ワークショップ「高校での AL 推進」(12 月)、ワークショップ「学生視点からの AL」(3 月)、学内 FD「私の AL 実践例」(2 月)、FD・SD 勉強会「発達障害をかかえる学生にどう向き合うか」(2 月)